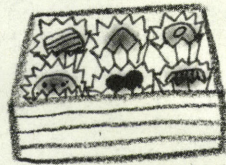


保育の現場から

縁という細い糸

永倉みゆき



「何たる縁か。こうして親しく、あなたの為には大切な幾とせを、日々にいっしょに楽しみ得たことか。」
（倉橋惣三「子どもたちを送る日」^{注1}より）

のだろうか。そしてこんな時は、目の前にいる子どもたちだけでなく、今まで出会って送ってきたさまざまな子どもたちの思い出が胸に去来する。

春めいてきた日差しの中でこの言葉に出会うと、思わず涙腺が緩んできてしまう。一年の中でも三月は特別感慨深い月である。進級や卒園を控え、今の生活との別れと新しい世界への出発への期待が交錯する三月の日々のかけがえのなさがその思いを生む

K子は、三年保育で入ってきた、おかつばでかわいい子どもだった。他の三歳児たちはまだまだ幼く、毎日思いもかけぬ天衣無縫ぶりを見せてくれる中で、K子はどちらかというとしつかり者という印象であったのは、凜とした顔立ちのためばかりではな

かつただろう。生活の中で困ることもなく、年齢よりずっとしつかりして見えるK子は、実はいろいろなうっかりしている（三歳児クラスだから当たり前だが）面もあつたのだが、何となく周囲から「しつかり者のK子ちゃん」というイメージで見られてしまっていることが、時には大変そうでもあつた。

こんなことがあつた。それが何だつたかは記憶の中で定かではないが、普段の生活の流れと違う何事かがあつた日のこと、K子はいつもの様にやろうとして、自分が違っていたことに気づき、「自分はちゃんとやつたのに違つてしまったこと」に大いに傷つき、その「いつもと違うことがわからなかつた自分」にも腹を立てるかのように、いつまでも泣き続けた。母親が迎えに来ててもK子は大きな目を涙でいっぱいにして、まるで「こんなはずじゃなかつたのに」と訴えるかのように延々と泣き続けたのであつた。K子はただの「大人の意を汲めるいい子」ではな

く、「自分がこうありたいと思うことがあると誇り高くそれを貫く子」なんだ、そんな印象をもつた出来事だつた。

そんなK子が夢中になつた遊びが泥団子作りであつた。好きになるとすごい集中力で没頭できるのはお母さん譲りのK子の魅力でもあつたが、顔に泥じるしが付くのもいとわず、日がな一日せつせと砂場で泥団子を作り続けた。

K子が卒園して何年も経つた日のこと、彼女のお母さんと出会つて話す機会があつた。高校を卒業して、三年ほど経つたところのことである。進学校に進んだ彼女は、今度はお菓子作りで夢中になり、大学の食物学科進学も検討したが物足りず、二年間東京の製菓専門学校で学んだ後、チョコレート専門店への就職を決意したとのことだつた。なんて一途な彼女らしい選択だろう。進学校ゆえさぞかし大学進学

を勧められたことだろうに、一步も譲らない強さに
感心もし、また彼女の選んだ道を尊重したご両親も
素晴らしいと思つた。

機会があつて銀座松屋の売り場にいるという彼女
を出張の折に訪ねたことがある。ちょうどバレンタ
インの時期であり、彼女は数人の御婦人を相手に接
客中であつた。お手並み拝見と少し離れて見ていた。

「これはどんな味なの」「年配の人向きなのはどれ」
「これとこれを詰め合わせてください」「これとどれ
が合いますか」四方八方から矢継ぎ早やに飛んでく
る質問と注文の矢に、にっこりと笑顔で的確に答え
る姿は、もう既に何年もチョコレート専門店に勤め
ている人であるかのように堂々としていた。声をか
けると、「Kちゃん、そろそろ片付けの時間だよ」と
言われて顔を上げた時のあの顔で、「あ、こんにちは」
と言うと、すぐにチョコレートの専門家の顔つきに
なつて「先生、どれにしますか」と聞いてきた。

その後、お母さんにその話をしたところ、幼稚園
時代にK子が泥のごちそうを一所懸命作つていると
ころの写真を見せてくださった。その真剣なまなざ
しが、チョコレート売り場の鮮やかな客さばきの時
のまなざしと重なつた。あの日が、ここにつながつ
ていたなんて……。その後、K子は本店に配属にな
り、まだチョコレートには触らせてもらえないもの
の、何をやつても興味津津、楽しくてならず、夢中
になつてやつていふことであつた。泥団子と
チョコレートトリュフ。自分の信じた道を貫く強い
意志。誰がああ遠い日にこの共通点を想像できただ
ろうか。そして、数年を経た後、なんとびつたりと
そのパズルがはまつたことだろうか。K子は、現在
チョコレート専門店からさらにまた羽ばたいて、自
分が学んだ製菓専門学校で教えているそうである。
高校の時の部活の先輩の結婚式のために、巨大な
ウェディングケーキを作つて感動されたり、その



▲真剣に料理する顔は今の彼女と変わりなく

ウエディングケーキを真剣なまなざしで作るK子の写真を見て、後輩が心を動かされて、自分の進む道を変更したりと、彼女の生き方は彼女にかかわるさまざまな人に、水面に広がる輪のように、静かに伝わっていつている。幼いK子の、真剣に遊ぶ姿の中にあつた喜びの心が、縁の糸でつながったさまざまな人の心の中で響き続ける。

人にとって、幼児期ほど無防備に自分をむき出しにして過ごす時期は無く、そこに居合わせる保育者もまた、その気持ちを真正面から受け止め、普段「大人」には出さないような顔と気持ちでそれと付き合う。いや、意図せずしてそうさせてしまう力が子どもにはある。その両者の真実味がスパークし合うようなやりとりが、保育の醍醐味だと私は思う。

鶴見俊輔は、大人が子どもと向かい合つて惹きこまれる時に、そこに生じるこのような不思議な時間

の流れを「神話的時間」と名付けた。^{註2}そして倉橋は、その子の人生に大きな影響を与えるかもしれない神話的時間に付き合えた幸せに「何たる縁か」と感謝するのである。

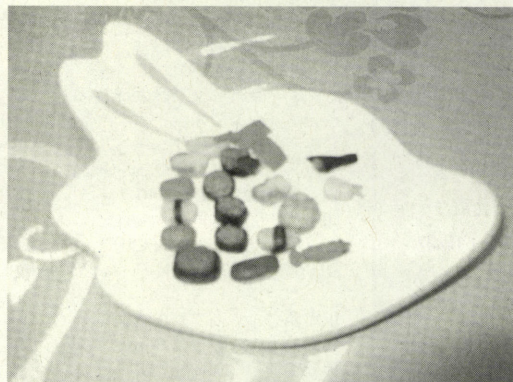
その時は、とにかく一所懸命自分のありつただけ子どもに応じるのだが、それがその子の人生のどの部分につながっているのかはまったくわからないし、そんなことを考えもしない。

それが時として、K子の様に思いがけない人生の展開を知らされることがあると、驚きつつも「成程そう言われれば……」と思いを振り返ってはそのつながりを深く考える機会となる。それはうれしいことでもあり、保育の怖さを知ることでもある。

幼稚園教育要領や保育所保育指針の中には確かに「生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期」「……の基礎を培う」と書かれてもいるし、実際そうなのだろうが、保育中の保育者には、今この

瞬間がその子の人生のどこかにつながっているという意識はないのではないだろうか。そこにあるのは、今、目の前の子どもに、ただただ心から誠実に対応することだけである。

倉橋はまた『育ての心』の中で「教育は育つものに対する信仰である。信仰は如何なる時にも、世界を明るくし、励まし、活気づける。わたしたちが此の今日、子どもらと共に笑い、歌い、遊び得るのも、此の信仰が与える光明によってである。」（「よい子どものために」^{註3}より）と述べている。「信仰」という言葉は、唐突に選ばれた言葉であるかのようにも思えるが、証されていないものを、自分自身の内から湧きおこる確信によって信じきるといえるかにおいて、まさに教育は信仰と同じであるといえるかもしれない。保育者は、子どもがもともと持っているであろう「育つ力」（それは誰もまだ見てはいないにもかかわらず）を信じて、困った時も悩む時



▲小1の時にK子が夢中になった粘土のごちそう作り
(おすし)

も、「きつと大丈夫」「きつと越えられる」と信じ続け、一緒に支えていく。そしてまた保育者自身も、自分の「子どもを信じようとする気持ち」が試される中で成長するのである。

子どもたちと保育者が、共に信頼し合い、精神的なつながりをもちながら生活する様子は、あたかも

「見えない糸でつながっているようだ」と言い表されることがあるが、つながれた細い糸はさらにその子どもの運命の糸の道とも複雑に絡まりながら延びていく。三月にある「進級」「卒園」はまさしく、結ばれていた糸が次の縁に向かって解かれていくその時なのである。

目の前の対応に精いっぱいな毎日の連続だが、実は「いま」というこの時が、遙かな未来とつながっているという縁の糸の先に思いを馳せることも、時には必要なだろう。そんなことに気づかされる三月の保育室である。
(常葉学園短期大学)

注(引用文献)

- 1 倉橋惣三『育ての心(上)』フレールベル館 二〇〇八年
- 2 鶴見俊輔『神話的時間』熊本子ども本の研究会 一九九五年
- 3 1に同じ
- 4 津守真・本田和子・松井とし『人間現象としての保育研究』光生館 一九九九年